

科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）研究成果報告書

平成25年6月24日現在

機関番号：64302

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2012～2013

課題番号：23652046

研究課題名（和文） 朝鮮博覧会と京城の空間形成

 研究課題名（英文） Imperial Exhibitions and the Construction and Modification
of City Space in Colonial Keijyo

研究代表者

朴 美貞 (Park Mijeoung)

国際日本文化研究センター・研究部・機関研究員

研究者番号：50589992

研究成果の概要（和文）：

「朝鮮博覧会（1929）」を契機に日本国内における「文化住宅」の朝鮮への受容と展開、京城の都市計画を中心に異文化統合に至る「植民地都市」の特質を解明した。植民地研究における非文字資料に関する史的価値を見出し、コレクターや研究者を中心とする共同研究会を主宰した。これによりコレクターと研究者の間の乖離を把握し、相互の協力体制を整えながら非文字資料に関する評価と活用に関する将来的・総合的視点について調査・検討を行った。

研究成果の概要（英文）：

The special features of the “Colonial City” as a focus of cultural integration in the urban planning of Keijyo came to light with the acceptance and development of the “Culture House” in Japan on the occasion of the “Korean Exposition (1929).”

The historical value of audio visual materials for colonial research was discovered, and joint research meetings consisting primarily of collectors and researchers were conducted. Through these, the deviation between collectors and researchers could be grasped, and while preparing a reciprocal cooperative system, investigations and examinations were undertaken from a future-oriented general perspective on the evaluation and usage of audio-visual materials.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
交付決定額	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学・芸術史・芸術一般

 キーワード：朝鮮博覧会、日本人居留地、朝鮮建築研究会、文化住宅、異民族間統合
(integrations)、伝統工芸、植民地都市、非文字資料

1. 研究開始当初の背景

近代博覧会史を見ると、日本は欧米で開かれる万国博覧会などに自らも出品するかたわら、それらの博覧会事業をいち早く学習し、

富国強兵・殖産復興をスローガンとして内国勸業博覧会を展開してきた。そして、アジアの植民地獲得と領有を続けていく中で、植民地博覧会を教材として有効に活用してきた、

との指摘がこれまでもなされてきた。植民地博覧会に関する研究は、パトリシア・モルトンの『パリ植民地博覧会—オリエンタリズムの欲望と表象』（長谷川章訳、ブリュッケ、2002年）をはじめ、日本語でも多数の先行研究が蓄積されている。近年では、台湾をはじめ、満州などのアジア各地における博覧会に関する研究成果も出始めた状況である。朝鮮で開かれた博覧会に関しても、朝鮮物産共進会（1915）と朝鮮博覧会（1929）に注目した先行研究（李泰文「1915年〈朝鮮物産共進会〉の構成と内容」（慶応義塾大学日吉紀要刊行委員会）2003年／山路勝彦『近代日本の植民地博覧会』風響社等）がある。これらは主に、朝鮮総督府による主催、植民地の中核都市である京城の旧朝鮮王宮を開催地としたこと、植民地施政を記念する行事の一環として最も規模が大きいイベントであったことに注目し、パビリオンの構成や展示内容、文明的・経済的格差を顕著に表す展示の仕組みなどを読み解くことで、主に日本式オリエンタリズムがそこに介入していたことが指摘されている。しかし未だ都市空間形成への目配りは弱い状況である。

2. 研究の目的

本研究「朝鮮博覧会と京城の空間形成」は、植民地朝鮮（1906-1945）で行われた博覧会事業（共進会や品評会と名付けられた等々のイベントを含む）の展開を、その開催地の都市空間形成との相互関連性に注目して分析を行う。とりわけ1929年の「朝鮮博覧会」を中心に、京城（現在のソウル）の都市空間がどのように編成され、植民地都市としてのその特質がいかなるものであったかを分析する。その際、当博覧会の開催に至るまでの日本人居留地の形成にも注目しつつ、博覧会事業展開に関わる日本人居留民団、商工会議所会員、協賛会組織などの人的・物的流動のみならず、京城の都市空間における行政的な側面、文化住宅をはじめとする「文化」にまつわる都市のモダニズム性、都市空間における異文化混合の特質（日本風・洋風・朝鮮風など）を探り、京城の都市空間における民族別対比から民族間融合への誘導の実態を解明する。

3. 研究の方法

本研究では、植民地朝鮮における博覧会事業と植民地都市の空間形成に関する詳細を解明するために、日本人入植者による居留地の形成・居留民商工会議所の活動と結びつけて考察する。したがって、植民地朝鮮の居留地

であったかつての植民地都市（釜山、仁川、元山、京城、木浦、群山、平壤、鎮南浦、大丘など）を中心に現地調査を行い、同時に現地の大学・研究機関などとも連携し「共同研究調査」「研究報告会」「国際シンポジウム」などを行うことにより研究を進める。

（1）平成23年度には、朝鮮博覧会に関連する一次的資料や関連データの収集を行う。同時に日本国内における朝鮮工芸に関する関連機関や施設の関係者と接触し実地調査を行う。なかでも、朝鮮伝統工芸に関する施設である高麗美術館をはじめ、浅川伯孝・巧兄弟資料館、松本民芸館、日本民芸館などにおいて調査を行う。この調査を通じて朝鮮の伝統工芸が日本にどのようにもたらされ、流通し、さらに現在に至るまで、どのように位置付けられてきたのかを確認する。

① 日本国内での研究体制

朝鮮の殖産復興産業に関する1次データを検索・収集する。申請者は朝鮮伝統工芸に関する日本国内の専門家との接触および該当機関や施設での調査を行う。一次調査としては、朝鮮伝統工芸の所蔵先である高麗美術館をはじめ浅川伯孝・巧兄弟資料館、松本民芸館、日本民芸館などの収集品形成過程に関して現地調査を行う（平成23年度4月～8月実施）。

② 国外での研究体制（現地調査および国際研究集会など）

平成23年度の8月以降には、螺鈿漆器の本産地である統營（韓国慶尚南道忠武市）での現地調査を実施する。また、博覧会事業をめぐる「居留地」（植民地都市）の都市化や近代化をめぐる現地調査に関しては、本研究テーマと関連する研究者や専門家たちを中心に現地の大学や研究機関と連携し、現地共同調査や国際シンポジウムなどを設け、学際的・国際的な相互交流を通じて議論を深める予定である。10月以後には、韓国の螺鈿漆器の本産地である統營（韓国慶尚南道忠武市）に赴き、当地の螺鈿漆器に関する現地調査を行う。螺鈿漆器の企業化・産業化と関連して、近代的な生産・消費システムを生み出す過程（工房の再現・博覧会などの展示・広報・販売事業）に携わった日本人企業家・日本人研究者の足跡を探る。その際、朝鮮伝統工芸の再現に関する詳細（材質・技法等）の様式に関する諸問題（朝鮮風／日本風、洋風／倭風→和風⇄洋風、東洋・アジア風などの異文化融合の特質）を分析する。

同時に、関連研究を行っている日本人研究者の同行や韓国側研究機関や該当研究者と連携し、かつての植民地都市であった群山

（GUNSAN）・木浦（MOKPO）などの現地調査を

並行する。日本人入植者の居留地形成をはじめ、租界地の形成、都市化・近代化の過程を探る。また、日本人企業家によって、朝鮮の伝統（1次）産業がどのように産業化・近代化していくのかに関する様々な事柄を確認する。群山という町の都市化とともに、博覧会事業がどのように設けられていたのかに関する側面を探る。上記の現地調査の際には、全北大学や木浦大学の研究者や研究機関と連携し、共同の現地調査を計画している。現地調査で得られた結果を基に高麗大学アジア問題研究所の「人文学事業団(Humanities Korea)」の分科会と共同のワークショップを設ける。

(2) 平成24年度は前年度に引き続き、図書その他の資料収集を行う。また、朝鮮伝統工芸の産業化・商品化の過程と伝統工芸がどのように需要されていたのかという点を近代的な消費システム（「朝鮮美術展覧会」をはじめ日本国内の「文展・帝展」などの美術制度的な側面、殖産復興のための「博覧会」会場の展示・広報の仕組みなど）と結び付けて分析・検証する。国内の金沢や石川県などの現地調査を行い、朝鮮の伝統工芸技術の学習と再現が宗主国日本の工芸産業に与えた影響の側面を探る。

日本国内における居留地（租界地）についても見学と調査を行う。さらに博覧会建築に関わる当事者とその関連データに関する調査収集を行う。

① 日本国内での研究体制

朝鮮博覧会と関連する一時的なデータの収集を行う。日本国内における居留地（かつての租界地）のありかたを、朝鮮における状況と比較考察する。特に、朝鮮で活動していた有力な日本人企業家に関する調査においては、当事者本人や遺族にインタビューを設ける予定である。実現可能な範囲で、人権を害さない配慮を踏まえたうえ、聞き取り調査を進める。

② 国外での研究体制（現地調査および国際研究集会など）調査に関しては、日本国内の共同研究者とともに、仁川（INCHON）と京城（現在のソウル）において、居留地の形成と植民地朝鮮における博覧会事業の変遷を、居留地の形成と居留民商工会議所の活動を中心に通史的に考察する。とりわけ1929年に京城の王宮で開催された朝鮮博覧会が、京城（ソウル）の都市計画に及ぼした影響を解明するための、第2回目の調査を行う。さらに、11月には、国際日本文化研究センターもし

くは韓国の大学や研究機関で日韓共同の「国際シンポジウム」を開く予定である。

国際研究集会に関する韓国の関連研究機関としては、ソウル大学校のアジア研究所・日本研究所をはじめ、高麗大学校のアジア問題研究所の「人文学事業団(Humanities Korea)」の分科会、全北大学の人文韓国・米・生命・文明研究院・藝術文化研究所・全羅文化研究所などの研究機関や所属研究者とワークショップをはじめ、共同学術シンポジウムの開催などを企画している。

日本国内では、本研究に関心を共有する研究者とともに「東北アジア」「東アジア」における国際的な人的・物的流動に関する学際的・国際的議論の場を設けることが可能であり、現在その準備をしている。

上記の現地調査をはじめ国際集会で得られた研究成果に関しては、以後日本語と韓国語その他の言語で活字化していく予定である。

4. 研究成果

(1) 平成23年度

① 京城における植民地都市の空間的特徴に関する調査に関しては、国際シンポジウム「万国博覧会とアジアー上海から上海へ、そしてその先へ」（2011年9月）で研究報告を行い、その内容を『東洋意識—夢想と現実のあいだ 1894-1953』（稲賀繁美編、2012年4月）に掲載した。

② 朝鮮半島における日本人居留地形成と都市化に関する研究調査の一環として「近代アジアをめぐる絵ハガキ研究会」を主催し、「東洋美学・東洋的思惟を問う」共同研究会と共催で推進した。並行して、「朝鮮風俗絵葉書」に関する日文研内でのデジタル化・DB化に関する準備とその手続きを進めた。

③ 朝鮮半島における日本人居留地の形成に関する調査の一環として朝鮮絵葉書を中心に、釜山・元山における日本人居留地の分析・検証を行い、その概略を情報誌「KOREA TODAY」に紹介した。

④ 済州道に現地調査を行い、済州大学校「海洋と環境研究所」「人文科学研究所」を訪問し、済州道における植民地期の水産漁業の展開と水産環境について専門家に意見聴取を行った。朝鮮半島における租借地・居留地の始まりが東アジアにおける海洋文化・水産開発と深いかかわりを持っていたため、20世紀初頭の朝鮮半島をめぐる日・露・朝・中と関わる鯨魚を中心とした研究調査を行い、国際集会「第二回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム」（延辺大学、同年8月）にて

報告の傍ら、当地（トモン・延吉など）での調査を行った。

⑤ 朝鮮博覧会と朝鮮伝統工芸に関する研究調査の一環で田邊孝次と朝鮮美術に関する調査を行い、ご遺族より遺稿を拝受した。遺稿はスキャン作業を終え、その一部について文字おこし作業と内容の検証・分析を行った。その結果を、日本比較文学会第47回関西大会シンポジウム「朝鮮半島の表象と日本社会—1920年から1930年代の美術を中心に」（同年11月）にて研究報告を行った。

（2）平成24年度

①朝鮮博覧会の開催に至るまでの京城の都市空間の変容と特質を、「文化住宅」を中心に、朝鮮への受容と展開（京城の都市計画を中心に「文化住宅」志向はいかに「洋風」「和風」「朝鮮風」の様式を展開させたのか）に関する現地調査を行った。調査・分析の際に用いた一次資料の中には、文字資料だけではなく、絵葉書・地図・絵地図・写真・旅行案内冊子などの非文字資料も重要な史料として活用し、史料としての学術的価値を十分に認識した。

②「非文字資料」に関する研究・歴史的資料（史料）としての学術的認識を高め、それらの収集・保存（データベース化）・活用方法をめぐって「一般コレクターと研究者」の協議の場として主に近代アジアをめぐる「絵葉書研究会」を推進した。本研究会は3回開催し、3回目には、国内外の美術史学、社会学、歴史学、建築学、情報学、考古学等々の諸分野の研究者をはじめ、絵葉書研究者、コレクターを交えての議論を行った。これにより従来の絵葉書研究における偏狭さを超えて、絵葉書の現存実態を把握すると同時にコレクター側の研究実態と研究者側の絵葉書研究を結びつけ、絵葉書の持つ研究対象としての歴史的価値を発見し、日文研所蔵の絵葉書をはじめ関連の画像データの保存や活用に関する相互の協力、非文字資料に関する研究の将来性や研究の方向性に関する相互認識と今後の継続的研究基盤を形成した。

③非文字資料は日本と近隣のアジア諸国における植民地問題（遺産）を引き継ぐうえでの、視点のズレ（誤解・紛争）を克服するためにも貴重であり、国内外の各所蔵先との連携も必要であると考え、ソウルの現地調査の際にはソウル市立歴史博物館、ソウル学研究所などを訪問して関連内容と今後の進展に関して協議し、今後の協力体制等を構築した。

④しかし、当初の研究計画に取り上げている朝鮮伝統工芸に関する調査と、仁川（INCHON）、群山（GUNSAN）、木浦（MOKPO）

などの「植民地都市」に関する現地調査と関連研究機関とのワークショップやシンポなどに関する計画は、予算や研究期間の都合により実現することができなかつたため今後、現在本研究課題の発展的研究課題として実施している科研費基盤研究（C）「朝鮮半島における植民地都市のハイブリッド(hybrid)性」にて継続していく予定である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計6件）

- (1) 朴美貞、「植民地朝鮮の表象—植民地の学習と教育のテキストとしての非文字資料」、東アジア文化研究、査読有、54集、2013年8月予定、ページ未定
- (2) 朴美貞、Once Upon a Time in Asia—⑦「元山居留民の商業活動」、KOREA TODAY、査読無、415巻、2011年、pp. 44 - 47
- (3) 朴美貞、近代コリアン画家物語「李仲燮—①」、KOREA TODAY、査読無、415巻、2011年、pp. 28 - 31
- (4) 朴美貞、Once Upon a Time in Asia—⑧「元山一名所と名物」、KOREA TODAY、査読無、416巻、2011年、pp. 44 - 47
- (5) 朴美貞、近代コリアン画家物語「李仲燮—②元山時代」、KOREA TODAY、査読無、416巻、2011年、pp. 26 - 29
- (6) 朴美貞、Once Upon a Time in Asia—⑨「興南—朝鮮初の重化学工業地」、KOREA TODAY、査読無、417巻、pp. 44-47
- (7) 朴美貞、近代コリアン画家物語「李仲燮—③元山時代」、KOREA TODAY、査読無、417巻、2011年、pp. 26 - 29

〔学会発表〕（計6件）

- (1) 朴美貞、絵はがきというテキストと植民地朝鮮、漢陽大学校東アジア文化研究所2013年国際学術大会「グローバル時代と東アジア文化の表象」、2013年02月01日～2013年02月02日、漢陽大学校人文科学大学205号
- (2) 朴美貞、植民地朝鮮の表象とテキストとしての絵はがき、シンポジウム「近代アジアをめぐる絵ハガキメディア—帝国・表象・ネットワーク（Picture postcards in Modern Asia: Empire, Representation, and Network）」2012年11月10日～2012年11月11日、
- (3) 朴美貞、絵ハガキで見る植民地朝鮮の表象とその機能、関西絵葉書研究会、2012年08月12日～2012年08月12日、大阪古書会館

- (4) 朴美貞、朝鮮美術史再考－田邊孝次と朝鮮美術史構想、日本比較文学会第47回関西大会シンポジウム「朝鮮半島の表象と日本社会－1920年から1930年代の美術を中心に」、2011年11月26日、大阪大学豊中キャンパス
- (5) 朴美貞、朝鮮博覧会（1929）と京城の空間形成－文化住宅展示を中心に、国際シンポジウム「万国博覧会とアジア－上海から上海へ、そしてそのさきへ」、2011年10月1日、国際日本文化研究センター
- (6) 朴美貞、コククジラはなぜ陸にいったのか－植民地朝鮮における日本人漁業活動の一考察、第二回中日韓朝言語文化比較研究国際シンポジウム、2011年8月23日、延辺大学

〔図書〕（計1件）

- ① 稲賀繁美編 論文寄稿、ミネルヴァ書房、東洋意識－夢想と現実のあいだ 1887－1953、2012年、pp. 544

6. 研究組織

(1) 研究代表者

朴 美貞 (Park Mijeoung)

国際日本文化研究センター・研究部・機関
研究員

研究者番号：50589992